

守るために‘染井吉野’の苗木配布および販売を中止しています。

サクラ類てんぐ巣病はかびの一種（タフリナ菌）が原因でおこる伝染病です。全国に植えられ春を楽しませてくれる‘染井吉野’はこの病気にとっても罹りやすく、罹ったまま放置しておくとう花が咲かなくなり、やがては枯れてしまいます。また、病気の桜が伝染源となって被害が拡大しています。このような中での‘染井吉野’の植栽はこの病気の拡大につながるため、2005年度からの苗木配布の中止に引き続き、2009年度より販売も中止しました。未来に向けて、‘染井吉野’の花を楽しむためにも、蔓延しているサクラ類てんぐ巣病を防除して行きましょう。

1. サクラ類てんぐ巣病の特徴

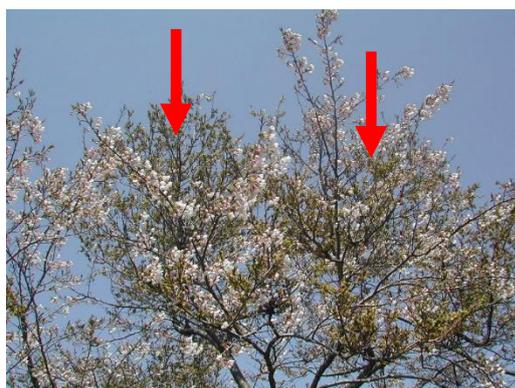
サクラ類てんぐ巣病に罹った枝は多数の小枝を発生しながら大きなかたまりとなり、数年間で枯れてしまいます。枝が枯れた部分からは太い枝や幹に腐朽が進み、やがて著しく衰弱し枯れてしまいます。また、病気になった枝は花が咲かず、健全な部分が開花している時に小さな緑の葉が開いてくるので花時の見映えが非常に悪くなります。伝染源となる胞子は病気になった枝についた小さな病葉の裏側につくられ、花が散り終わった頃から飛散し始めます。胞子は雨の日に雨水に混ざって広がるといわれています。この病気は川沿いや湖の周辺、霧のかかりやすい場所など空中湿度の高い場所や日当たりや風通しの悪い場所で多く発生しています。また、植栽間隔が狭く、育成に伴って過密な条件になると発生が目立ってくる様です。サクラ類てんぐ巣病に罹ったまま放置しておくとう病原菌の密度が高まるため、樹全体に被害が広がるとともに周辺の桜にも伝染してゆきます。このような桜を放置したまま、近くに植栽すると若木でも感染し、被害が拡大、蔓延します。

2. サクラ類てんぐ巣病の防除対策

現在、最も効果的な防除方法は病気に罹った枝を切除して伝染源を無くすことです。切除の時期は病気の枝が見分け易いこと、胞子が飛散する前であること、剪定の適期であることなどから落葉期が適しています。切り口には保護剤を塗布しましょう。また、見落としやその後の発病などがあるので、2～3年は継続して行う必要があります。なお、切除と併せて肥料を施すことは、樹勢の回復に大いに役立ちます。

3. 新規植栽に当たっての留意点

‘染井吉野’は成長速度が早く大木となるので植栽間隔が狭いとすぐに過密状態となってしまいます。そうになるとサクラ類てんぐ巣病が発生しやすくなるので十分に間隔を空けて植えましょう。また、サクラ類てんぐ巣病に罹りにくい桜の品種もあるので、このような品種を選ぶことも大切です。



サクラ類てんぐ巣病に罹った枝の状況

左写真 落葉期

- ・枝が細かく分かれている。

右写真 開花期

- ・開花期に新芽が伸びている